

○2022年12月10日～12日に、調査船金星丸を用いてスケトウダラを対象にした計量魚探調査、CTDによる環境調査を実施したので、結果をお知らせします(図1)。
調査結果は下記の函館水試ホームページからもご覧になれます。

<http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/hakodate/>

- スケトウダラ魚群は主に奥尻海峡を中心に分布していた。
- 魚群は概ね水深300～500mに分布し、分布の中心は前年と同様に水深400m前後に見られた。
- 魚探反応量は前年の0.7倍で、引き続き低水準。
- スケトウダラが分布していた水深300～500mの水温は、乙部沖および江差沖では0.8～2.7℃と平年より0.5～1.5℃高くなっていました

● スケトウダラ魚群の分布状況

・ 水平分布

スケトウダラ魚群の多くは、奥尻海峡(奥尻島の東側)中心に分布していました(図2)。一方、乙部以南の海域ではほとんど分布が見られませんでした(図2, 3)。

・ 鉛直分布

スケトウダラ魚群は概ね水深300～500mに分布していました(図3)。分布の中心は、前年と同様に水深400m前後に見られました。

● スケトウダラ延縄漁場周辺の魚探反応量の経年変化

スケトウダラ延縄漁場とその周辺(図1の赤破線枠内)のスケトウダラ魚探反応量は前年の0.7倍で、引き続き低水準で推移しています(図4)。

● スケトウダラ延縄漁場域の水温環境

スケトウダラが分布する水深300～500mの水温は、乙部沖および江差沖では0.8～2.7℃で平年より0.5～1.5℃高く、上ノ国沖では0.7～1.7℃と平年並みでした(図5)。

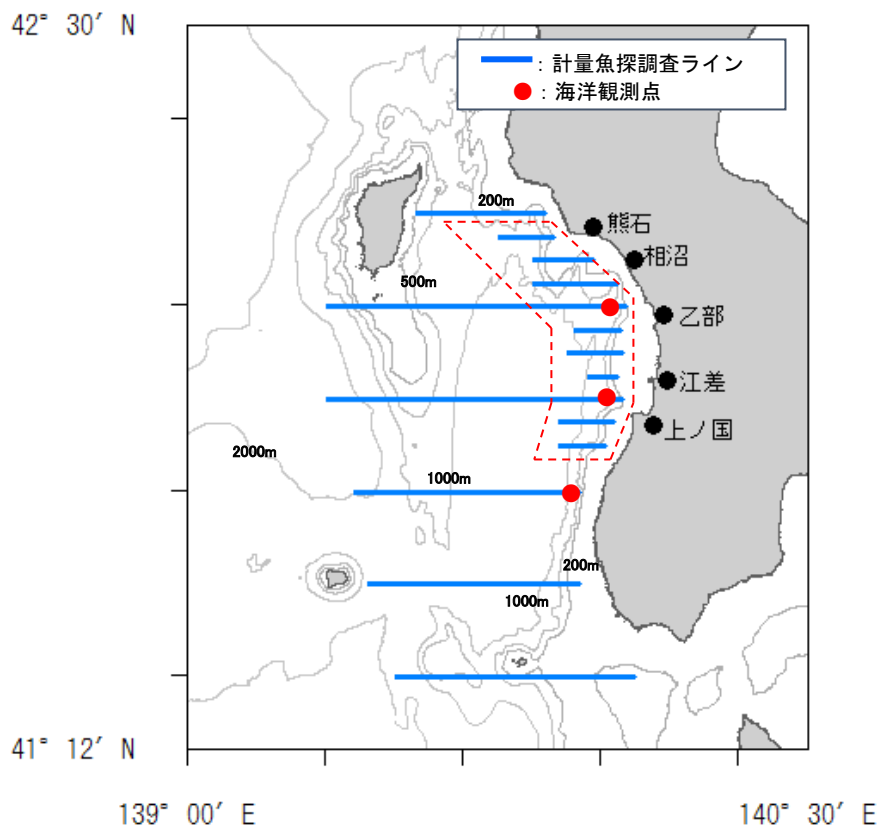


図1 調査海域図
※赤破線は図4の魚群反応量を算出した範囲

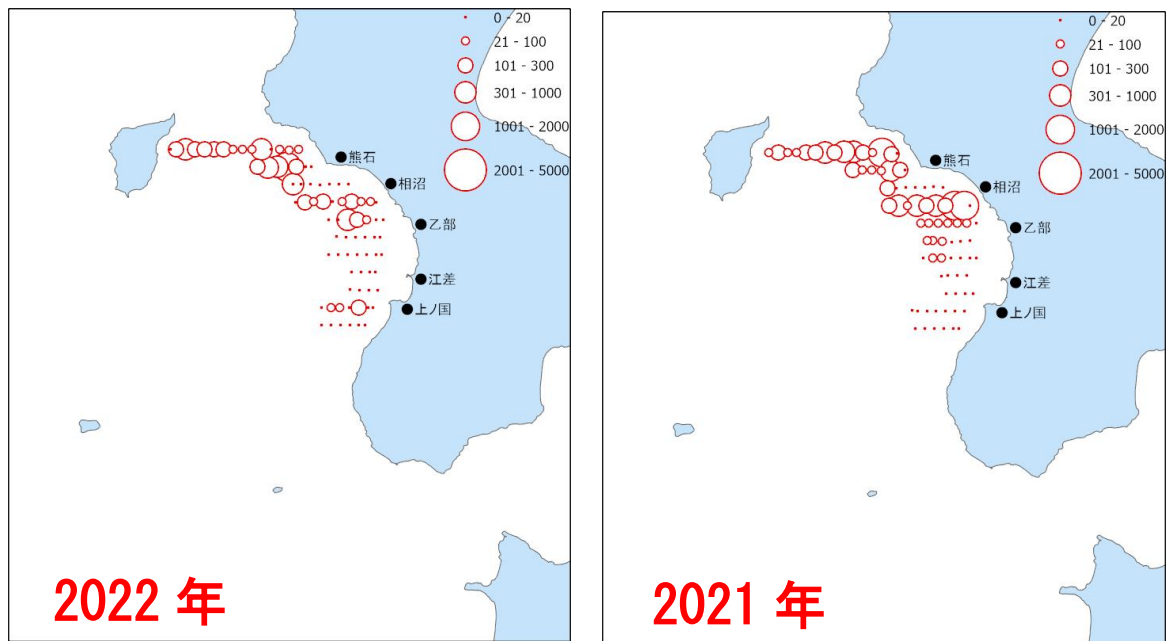


図2 計量魚探調査による魚群反応量(NASC(m^2/nmi^2))の水平分布
※魚群反応量(NASC) : 1マイル平方面積あたりの魚探反応の強さを表す。
○の大きさが魚群反応量の強さを示す

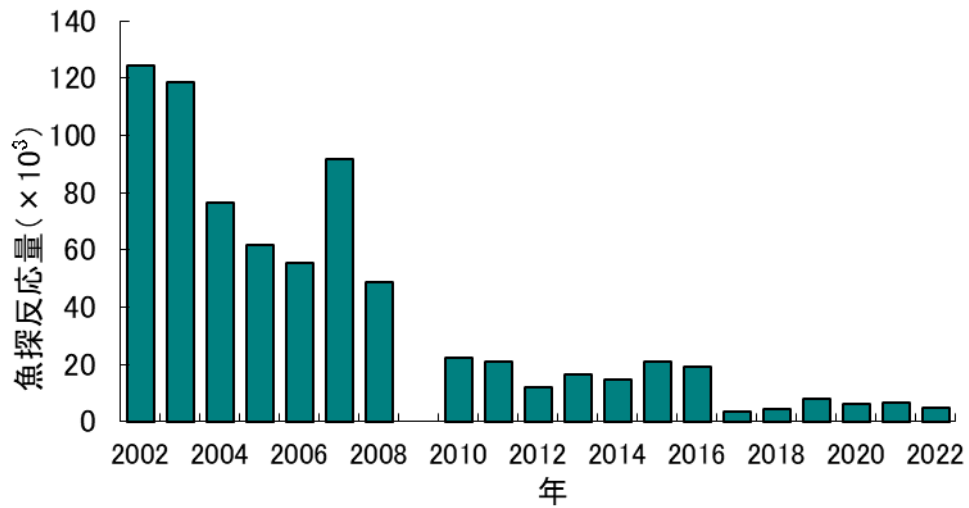


図4 スケトウダラ延縄漁場とその周辺における魚群反応量の経年変化
 ※2009年は荒天で調査できず

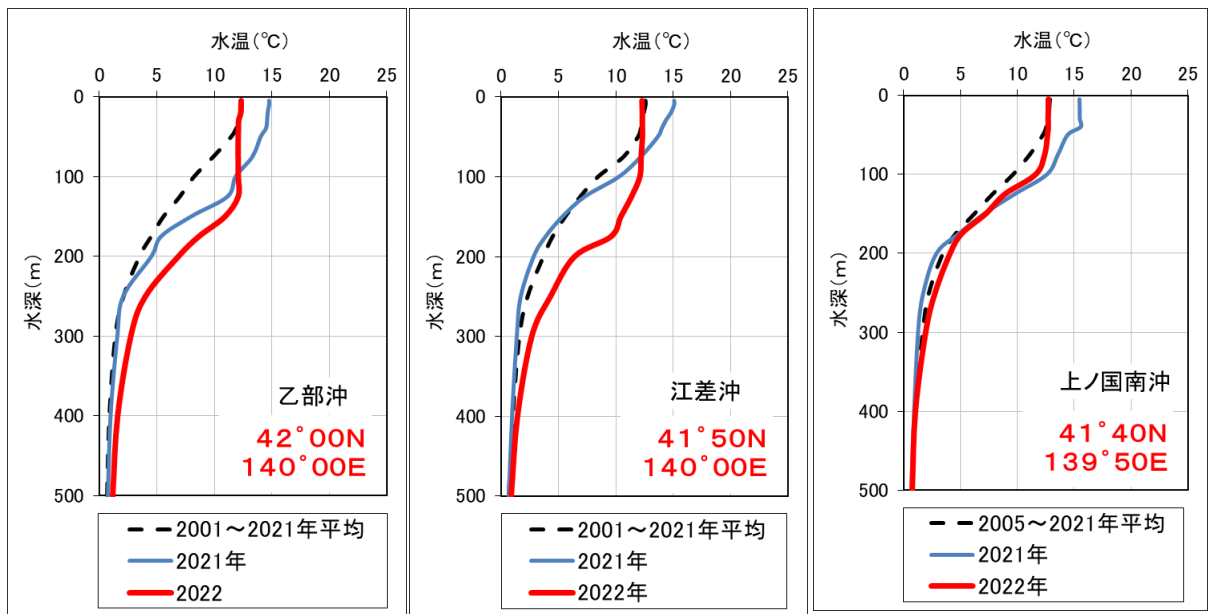


図5 乙部沖(左), 江差沖(中), 上ノ国南沖(右)の鉛直水温分布(2022年12月)